

論文

フロレンシオ・バレラの野郎ども
 ——藤沢市湘南台のアルゼンチン系コミュニティ、1988—2012——

Learning to Migrant Labour

Dynamics of Argentine Community in Fujisawa, 1988-2012

キーワード：『エスニック・コミュニティ』『日系人』『都市モノグラフ』

樋口 直人

HIGUCHI, Naoto

(徳島大学総合科学部)

稲葉 奈々子

INABA, Nanako

(茨城大学人文学部)

1. 都市モノグラフに対する不満——問題の所在

筆者は都市社会学を専門とするわけではないが、移民研究をしていると特定地域の移民コミュニティを単位とした分析・記述は不可欠であり、都市社会学との接点が生じる。日本の都市社会学における移民コミュニティの研究は、厳密な用法でなくとも説明変数と被説明変数のセットがないまま調査結果を記述する傾向が強い。だが、コミュニティの動態をみるに際して、それを規定する要因を明示しなければ、その特質を明らかにすることは不可能ではないか。本稿における筆者の関心は、こうした問題意識を抱きつつ、藤沢市湘南台地区を舞台としたアルゼンチン系コミュニティ¹⁾のモノグラフを描くことにある。その際、何がコミュニティの動態を理解する上でのポイントなのか、そうした観点から先行研究をどのように評価できるのかをまず概観したい。

英語圏での移民研究のモノグラフでは、雑誌論文とは異なり明確な分析枠組みが提示されることは多くない。その意味で記述的といえるが、緩やかな形で説明—被説明の関係が規定されているものは数多くある。法・政治に着目する立場からは、政治的資源の配分がエスニック・コミュニティの形態を規定するという議論 (Breton 1991)、トランスナショナルな生活形態が独特の政治行動を生み出すという調査 (Jones-Correa 2000) もある。非正規移民については、法的地位の不安定性に起因する生活全般の不安定性がネットワークを疲弊させ、コミュニティが形成不全になるという研究がある (Mahler 1995; Menjivar 2000)。その一方で、政治難民として政治に規定されていたマイアミのキューバ系移民は、集団の連帯を経済活動に転化してエスニック・エンクレイブを作ってしまった (Portes and Stepick 1993)。これらは、政治的条件という構造的制約と集団の反応の関係を扱っており、両者のどちらに因果の起点をおくにせよ議論のポイントは明確である。

経済についてみると、Light and Bonacich (1988) は集団内に蓄積された経済的資源によってコミュニティが変化するという図式を採用している。その一方で Waldinger (1996) は、ニューヨークの労働市場という構造的要因により、エスニック集団の分岐を説明した。エスニック・ビジネス研究から出発した Min (1996) は、自営業という職業的地位により集住地でのエスニック関係が規定されるという。よりエスノグラフィ的な Margolis (1994) も、労働市場と法的地位がブラジル人のコミュニティを不可視なものにするとしている。労働市場を分析しているわけではないが、Gans (1982) の著名なモノグラフは、イタリア系移民の階級をキーワードとしてコミュニティの特質を語っていた。

このように、記述的なモノグラフといっても描きたい状況を規定する変数は存在し、それがなければ特定のコミュニティの特徴を明らかにすることは難しい。そうした点に鑑みると、日本の移民に関して特定地域を舞台とするモノグラフには、「何が状況を規定するのか」という問題意識が希薄である。近年では、単に都市コミュニティといった雑駁な把握ではなく、「福祉」や「住宅」といった形で特定の要素に特化した研究もみられるようになった(二階堂 2007; 大倉 2012)。しかし、被説明変数が増えた一方で説明変数は依然として未整備であり、その意味で記述が細かくなったという以上の評価はできない。特に奥田道大に連なる研究者は、「位相」という高度に記述的な用語をキーワードとしており(e.g. 藤原 2008; 広田 2003; 奥田 2004)、「位相」を規定する要因に思いを馳せることはないようにみえる。

その意味で、谷 (1992) の当初の問題意識は現時点からするともっと発展させるべきだったものと筆者は考える。彼は「脆弱な産業構造」に着目しつつ、大阪市生野区における在日コリアンと日本人の民族関係を明らかにしようとした。しかし、その時点での議論は職業・階層とは関係なく展開され、民族関係を規定する構造的要因が特定されないまま、その類型だけが示される。産業構造がエスニックな連帯とどう関係しているのか、それがエスニック関係にどう影響しているのか、換言すれば民族と階級はどのように結びついているのか。谷を中心とするグループの研究では、そうした点が未解明のままだった。

筆者は、在日南米系移民の状況全般をみるにあたって就労こそが最大の規定要因と考えるが、南米系コミュニティに関する先行研究はそうした認識に乏しい(広田 2003; 小内・酒井 2001)。ただし、労働市場と地域社会の関係を明示的に扱った研究でも、移民コミュニティのモノグラフとして展開できているわけではない(梶田・丹野・樋口 2005)。本稿で筆者が試みたいのは、労働を緩やかな説明変数としつつ移民コミュニティの動態をモノグラフ的に描くことにある。

2. 湘南台のアルゼンチン系コミュニティ——概要と問題設定

2.1 日本におけるアルゼンチンの首都としての湘南台

前節で述べたことを具体的にいうと、本稿の目的は、藤沢市湘南台周辺におけるアルゼ

ンチン系コミュニティの変遷を分析的に記述することにある。湘南台周辺とは、小田急、相鉄、横浜市営地下鉄線の湘南台を中心とし、小田急線を藤沢方面に六会日大前、善行まで、新宿方面に長後、高座渋谷までの各駅を最寄り駅とする範囲を指す。分析的な記述とは、前節でみた問題意識を展開するため、コミュニティを規定する 2 つの変数を緩やかに設定したうえで、それとの関連でコミュニティの動態を描くことを意味している。さらにアルゼンチン系コミュニティとは、アルゼンチンに生活の本拠をおいている（いた）人が日本で集住する地理的空間を指しており、必ずしも社会的凝集性を前提としていない。

アルゼンチン国籍登録者数は 1990 年代を通じて 3000 人前後で推移しており、2001 年にアルゼンチンで経済危機が生じてから 4000 人弱まで増加した。それからリーマン・ショックの影響で 3000 人近くまで減少したが、この間ずっと全国最大の集住地だったのが神奈川県であり、3 割前後を維持してきた。もともと、デカセギブームだった 90 年前後には神奈川県の登録者数は全国比 4 割以上を占めており、徐々に比率が下がってきたとはいえる。そして神奈川県内でもっとも登録者数が多いのが藤沢市で、89-90 年には全国の登録者中 4 分の 1 が藤沢市にいたこともある。それから比率は下がって 2000 年代後半には 1 割程度となるものの、全国でもっともアルゼンチン系移民が住む基礎自治体であることに変わりはない。

この地にアルゼンチン系コミュニティができる経緯については次節で述べるが、他の南米系移民の集住地と同様に産業構造が最大の規定要因となっている。それに加えて、単に藤沢市というより湘南台が「日本におけるアルゼンチンの首都」となり、小田急線の湘南台駅前再開発以前のロータリーが「五月広場」と呼ばれたのは、ネットワーク要因も影響している。すなわち、後述するように同駅周辺に派遣業者が集中して立地し、それがアルゼンチン系移民を呼び込んできたからである。

2.2 調査とデータについて

本稿のもととなる調査は、2005 年から現在までインタビューとフィールドワークを並行して実施しており、量的なデータとしては 2010 年 8 月までに行った 367 名に対するインタビュー記録を用いる²⁾。この間、アルゼンチンに 9 回通って調査を進め、並行して日本側でも聞き取り調査を進めた。その過程で、日本を經由してメキシコで働く 2 名に対しても、2006 年 11 月にメキシコで聞き取りしている。このうち湘南台居住経験者は 96 名であり、表 1 と表 2 で用いている。さらに、調査対象者から同居家族について聞き取りした分を加味したものを、図 1~2 で使用している。

調査に際しては、基本的に機縁法を用いており、その意味でアルゼンチンからのデカセギ者という母集団と同質のサンプルではない³⁾。具体的には、日系団体の関係者やコロニアの住民経由、日本のラテンパーやバーベキュー、タノモシに参加しての調査依頼、日本とアルゼンチンでの聞き取り時に紹介を依頼するなどといった方法を組み合わせている。実

際、調査を手がけた当初は筆者がスペイン語を使えなかったため、日本語ができる者に聞き取りが偏っていた。調査後半になってスペイン語での聞き取りを重点的に進めたが、日本語ができて時間に余裕のある一世のネットワークに乗って聞き取りを進めたこともあり、この偏りは解消されていない。

つまり、このデータは湘南台のアルゼンチン系コミュニティを無作為抽出したものとは言いがたいが、公式の統計と比べて 1 つ大きな強みがある。アルゼンチン日系社会では 3 分の 1 の者が日本国籍を持っており、国籍だけみたのではデカセギ者の相当程度が抜け落ちるが、本稿で用いるデータは日本国籍を持った者も含めている。そのため、公式の統計よりアルゼンチン系コミュニティの実態を（特に一世について）よりよく反映している。

2.3 問題設定

特定地域の移民を対象としたモノグラフを描くには、移民先だけでなく出身地も含めたトランスナショナルな空間を分析単位とするのが、現時点でもっとも適切な方法と筆者は考える。近年では、そのようなトランスナショナルなコミュニティを前面に打ち出した作品も増加している (e.g. Grasmuck and Passer 1991; Smith 2006)。だが、本稿では「移民先のコミュニティ」に分析範囲を限定する伝統的なアプローチをとる。筆者の調査は、アルゼンチンで多く聞き取りを行っており、その意味でデータ上もトランスナショナルな分析に向いている。が、「湘南台での居住経験」を共通項として定点観測をすることが目的であるため、調査対象者が湘南台にいる間だけを分析対象として限定する。

湘南台に居住経験のあるアルゼンチン系移民は、他の地域と比べて 2 つの特質がある。第 1 に、湘南台への居住経歴の有無とさまざまな変数の関連をみたとき、日本での居住期間と日本でのネットワークには有意な差があった⁴⁾。すなわち、湘南台居住者の方が日本に住む期間が長く、恐らくはそれと関連してネットワークの保有量も多い。

だが、同時に表 1 と表 2 が示すように渡日時の斡旋業使用の有無と日本語会話力にも有意な差があった。湘南台に居住したことがある者は斡旋業を介して日本に来ることが多く、日本語会話力も相対的に低い。それ以外は、湘南台とそれ以外の地域で差はなかった。南米系移民のコミュニティは、均質な労働市場に規定されるがゆえ地域間の相違が小さいという理論的予想に沿った結果であった (梶田・丹野・樋口 2005)。だが、斡旋業の利用と日本語会話力の低さは、コミュニティの本質を規定する要因である。斡旋業を利用する者は工場での派遣労働に従事しており、これはデカセギの典型的な像に近い。横浜市鶴見区にもアルゼンチン系コミュニティが存在するが、ここで働く男性はほとんどが電気工事業に従事している (樋口 2012)。日本国籍を持つ者が多いアルゼンチン系移民は、通常のデカセギとは異なる労働市場に編入される比率が他の国からのデカセギ者より高い。その意味で、鶴見はアルゼンチン系コミュニティならではの特質を示すが、湘南台は地方工業都市にあるブラジル人コミュニティに性格が近いといえる。そこで以下のような第一の問い

が生じるが、これについては次節で答えることとする。

- ・ 問1：なぜこのようなコミュニティが湘南台に形成されたのか。確かに、藤沢市は神奈川県内では南米系移民が多いが、アルゼンチン系移民の集中度は際立っている。何がそうした状況をもたらしたのか。

表1 湘南台居住者と斡旋業の使用

	斡旋業の使用						
	なし		あり		合計		
	N	%	N	%	N	%	
湘南台居住経歴	なし	176	64.9	95	35.1	271	100.0
	あり	48	50.0	48	50.0	96	100
	合計	224	61.0	143	39.0	367	100

カイ二乗検定 $p < .01$

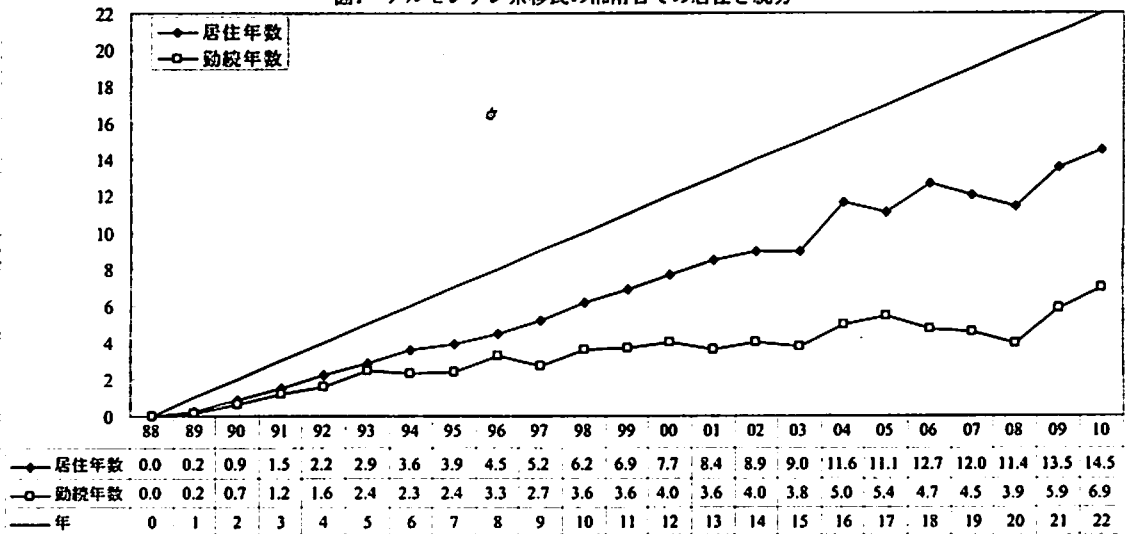
表2 湘南台居住者と日本語会話

	日本語会話										合計		
	できない	多少はできる		日常会話可能		会話で問題なし		ネイティブ		N	%		
		N	%	N	%	N	%	N	%				
湘南台居住経歴	なし	30	11.1	8	2.9	30	11.1	82	30.3	121	44.6	271	100.0
	あり	20	20.8	5	5.2	15	15.6	26	27.1	30	31.3	96	100.0
	合計	50	13.6	13	3.5	45	12.3	108	29.4	151	41.1	367	100.0

カイ二乗検定 $p < .05$

注：ネイティブとは、日本語を母語水準で使える場合を指す。

図1 アルゼンチン系移民の湘南台での居住と就労



注：図の縦軸は湘南台での居住/就労年数を示しており、88年からずっと湘南台に住んで同じところで働き続ければ直線のようになる。居住=回答者のうち当該年に湘南台にいた者の湘南台での平均居住年数。就労期間=湘南台に居住していた者の当該職場での平均就労年数。

居住と就労の状況を示した図1をみると、2003年まで居住年数の伸び率は比較的安定していた。それに対し、同一職場での勤続年数は1996年からほぼ横ばいで伸びていない。同

じ所に住みながらも、転職や配置転換が多く1つの職場に定着しない状況が浮かび上がる。さらに、2004年からは様相が変化して不安定な状況が続いており、この時期には短期居住者の流出が増加している。湘南台のアルゼンチン系コミュニティは、居住という面では一定の安定性を持っていたと考えられるが、就労は不安定なままだったと見てよい。そこで第2の問いが生じることとなり、それについては4節で答えていきたい。

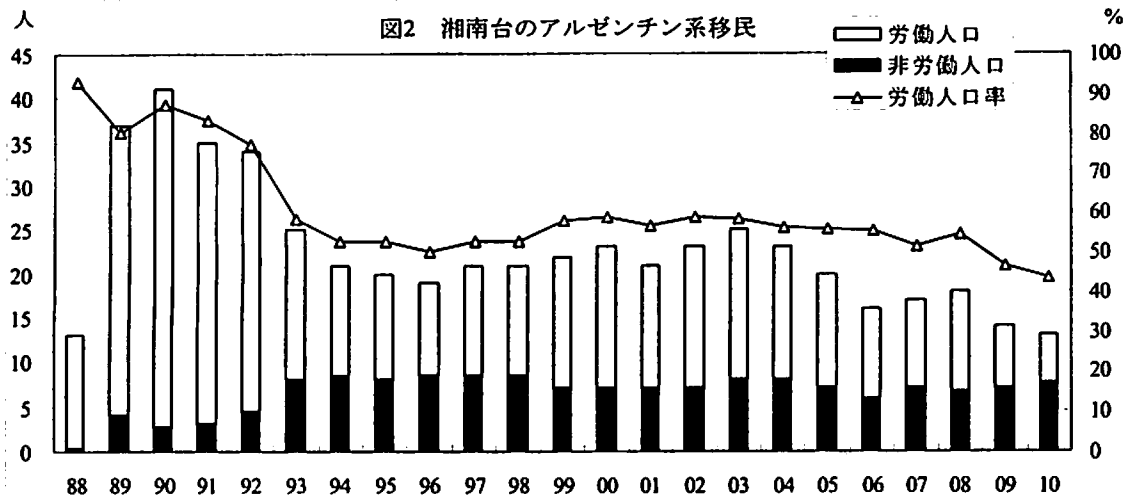
- ・ 問2：長期化する居住と安定しない就労という条件のもとで、誰がどのようなコミュニティを形成するのか。

湘南台で形成されたアルゼンチン系コミュニティは、2008年のリーマン・ショックで2つの性質を強める結果をもたらした。まず、帰国する者が増加したため、長期滞在する者が残ることとなり平均居住・就労年数が上がっていった。ただし、そうした者のすべてが安定的な仕事があったから湘南台に住み続けたわけではない。居住期間が長くなっても転職が多い生活は、若年層を中心にかえて強化されたともいえる。そこで第3の問いが生じるわけで、これについては5節の事例を通して考えてみたい。

- ・ 問3：リーマン・ショックによる大量失業状況の結果、湘南台のアルゼンチン系コミュニティにはどのような変化が生じたのか。

リーマン・ショックが強化したのは、居住の長期化と不安定な就労という側面だけではない。これを示すのが、労働人口と非労働人口で区分した図2であり、これは非労働人口の増加という時系列的な趨勢と、それがリーマン・ショックで強まったことを表す。ここでいう労働人口とは就労者と失業者を指しており、非労働人口は就学者、専業主婦、引退した高齢者からなる。デカセギブームだった90年前後には、非労働人口は絶対数・比率とも低かったのに対して、1993年からは数・比率とも多くなっており、これは日本での出産や子ども連れでのデカセギが増加した結果である。この段階で非労働人口の比率は4割程度に達しており、必ずしも就労の側面だけでコミュニティを語れない段階に到達したといえるだろう。リーマン・ショックはそうした傾向を強める結果をもたらしており、2009年以降は非労働人口のほうが多くなっている。若年層の方が減少率が高いことは公的統計からも示されているが、この場合の非労働＝高齢層の比率増加は何に起因するのか。ここで第4の問いが浮かび上がるが、それについては6節で答えていきたい。

- ・ 問4：なぜ高齢層のほう湘南台に住み続けることができたのか。換言すれば、リーマン・ショックの影響を高齢層のほうを受けなかったのはなぜか。



3. 黎明期——一世たちの派遣業開業

2012年時点での湘南台には、図3が示すようにアルゼンチン系の派遣業者が4社ある。このうちA社とB社は兄弟が営んでおり、もともとはボリビアのコロニア・オキナワからアルゼンチンへの転住組だった。2人は、当初は共同経営していたがすぐに分裂して別々に会社を設立した。最初に日本に渡ったのがB氏であり、フォークランド戦争の勃発でアルゼンチンに未来はないと思い、1982年に生まれ故郷である沖縄に戻って働いていた。が、賃金が安いので神奈川県平塚市にいたコロニア・オキナワの知り合いに頼んで平塚の工場に仕事をするようになった。この工場も賃金が下がったため、沖縄で知り合った日本人に湘南台のいすゞ関係のプレス工場を紹介してもらったのが、アルゼンチン系移民と湘南台の接点の始まりである。

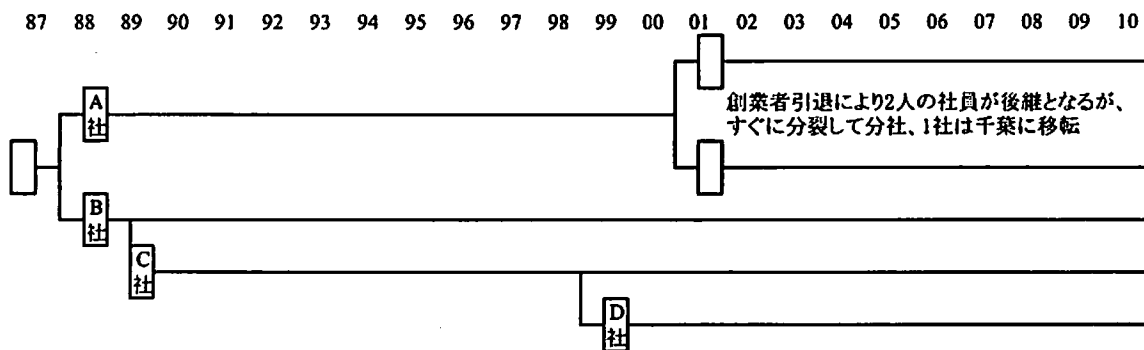


図3 湘南台のアルゼンチン系派遣業者

とはいえ、B氏はすぐに派遣を始められたわけではなく、このプレス工場に2年間働こうちに工場が火災にあって操業が停止し、社外工は全員解雇された。それから2年間は、B氏自身も記憶にないくらい多くの仕事をして食いつなぐうちに、アルゼンチンからB氏を頼

ってデカセギに来る者が増加したという。そうした人たちを会社に紹介するうちに、プレス工場から正式に請負業を設立するよう勧められ、ノウハウも教えてもらって起業した。法人設立前には兄である A 氏と共同で仕事をしていましたが、方針の違いから別々に仕事をするようになった。

アルゼンチンから湘南台への人の流れを作ったのは、この AB 兄弟だといっても過言ではない。この時期に湘南台に来る者の大多数は、アルゼンチン側の旅行社でこの兄弟の仕事を紹介され、旅費の立替を受けて湘南台のいくつかの工場へと送られていった。特に旅行社→A 社→プレス工場という経路がもっともよく使われた。この時期には、ほとんどが湘南台近くのいすゞ自動車関連工場で働いており、そのなかでもプレス工場では最盛期に 600 名のデカセギ者が働くなど雇用吸収力は大きかった。

その後は、藤沢市南部にある電機関係の工場へと女性労働力を送り込む経路も、AB 両社が開拓しており、男性が多い自動車関連と女性が多い電機関連というニッチも形成された。これらはフルタイムの間接雇用であり、南米系移民の典型的な仕事であるが、それ以外にも軽工業や清掃、介護などパートの仕事に進出することで、主婦や高齢者の職も確保されている。これは、後にみる若年層と高齢層に対するリーマン・ショックの違いの影響となって現われることとなる。

それ以外には、B 社で働いていた一世が同じく湘南台で C 社を設立して独立し、アルゼンチン系業者で最大手にまでなった。が、C 社は厚木の弁当工場への人の送り出しから始まり、弁当工場にほぼ特化して全国展開したため、湘南台での雇用は生み出していない。C 社から独立した D 社も同様で、弁当工場に特化しているため湘南台には事務所しかない。

4. フロレンシオ・バレラの野郎ども——青年たちの社交活動

「今を生きたいんだよ」。ブエノスアイレス郊外にあるフロレンシオ・バレラ（以下バレラ）の一軒家で飲みながらホセはいう⁵⁾。ここは日本にいるホセの兄が所有する家で、ホセは 2009 年に日本から戻ってから、この兄の家に住んでいる。筆者は、バレラでアサード（アルゼンチン式バーベキュー）を楽しんだ後に夜も遅いので泊まっていけ、といわれ、ホセの家で飲み直していたのだった。ホセは 1972 年生まれで、勉強が嫌いだからと中学を中退し父親の花弁栽培を手伝った後、1992 年に渡日した。17 年間日本にいたが、日本語はほとんど話せない。ホセは湘南台ではなく厚木に住み、バレラではなくラプラタ出身者が多くいた鉄工所で働いていたが、湘南台のアルゼンチン系コミュニティと密接に関係していた。

アルゼンチン日系社会は、クリーニング業と花卉（ないし野菜）栽培を二大業種としていたため、前者が多い都市部では集住地を持たなかった。クリーニング店は分散して立地するためであり、その代わりにエスコバール、ラプラタ、バレラといった近郊都市にあるコロニア（農業移住地）を基盤とする集住地ができている。このうちバレラには沖縄系が多く二世・三世はあまり日本語ができない、周辺にスラム街が多いという特徴がある。そ

のため、他の地区出身の日系人はバレラの日系人を「危ないやつら」と思っている、とホセはいう。

しかし、ホセたちにとっては、バレラの日本人会館でアサードをするために毎週集まった友人関係は、日本でも用いられる社会関係資本であった。アルゼンチン系コミュニティには、湘南台という集住地があり高所得層たる派遣会社の経営者も擁しているが、全体を束ねるような顔役はいない。派遣会社の経営者は、同胞を搾取するというイメージを払拭することが難しいし、それ以外の者も断片化された集団内での紐帯を広げようという志向がないからだ。だが、小さなグループは湘南台を含め各地にできており、その世話役のほとんどはアルゼンチン日系社会で活発に活動している人たちだった。

ホセのグループも、50-60人いた仲間のほとんどが日本に行き、彼を含めた世話役4人のうち3人が日本にいたという。彼は、その社会関係資本を日本で用いてアサードのグループを作り、当初の頃は暖かい4-10月に相模川河川敷で毎月アサードをしていた。それから年2回に頻度は下がったものの、50名くらいで名簿を作って実際には30名くらいが毎月500円出して倉庫を借り、アサードの道具を預けるまでに年中行事とした。最初はバレラのメンバーで始めたアサードだったが、湘南台という新たな地縁や人づてに参加者が増え、筆者が参加した2008年5月4日には77名が加わっていた⁶⁾。そのうち小学生以下の子どもは11名であり、家族で参加できる最大のエスニックな行事がアサードだといってもよい。

ホセの余暇活動は、アルゼンチンの仲間集団を再構築することにとどまらなかった。彼は次節に登場するディエゴが経営する湘南台のラテンバーに週末になるとよく出入りし、97年から同居していた母親が作るエンパナダ（ミートパイ）をここに卸してもいた。毎週土曜日になると、ラテンバーには15人くらいの仲間が集まり、筆者がいた時もバドワイザーの小瓶を5本飲み干していた。ホセにとって、エンパナダは母親の小遣い稼ぎにはなるが、それを届けるたびに1本600円のバドワイザーを何本もあけて帰ることになる。「今を生きたい」というホセの言葉には、先のことを考えず楽しんで消費したいという含意が多分にある。

ホセの消費は単に外で飲むだけに留まらず、アルゼンチンでは買えないような自動車の購入にも費やされている。彼は、来日4年後の96年にホンダのアコードを購入し、それからトヨタのアリストを経て、帰国するまでトヨタのソアラに乗っていた。滞日期間が長くなるにつれて自動車を持つ人は増えていくが、ホセが乗るようなスポーツタイプの高級車を所有するのは限られており、筆者が聞き取りした中では経営者を除けば3名しかいなかった⁷⁾。若者で独身であるのはもちろんのこと、持ってしまうと貯蓄が叶わなくても買ってしまうようなハビトゥスがなければ、こうした自動車を購入するのは難しい。ホセは、スポーツカーだけでなく当時高価だったiPhoneもいち早く購入しており、「先のことは考えていなかった」という彼の言葉通りの生き方をしていた。派遣労働とはいえ、長時間働いていればホセ程度の消費は可能である。同時に、派遣労働ゆえホセのような消費をしていれ

ば貯金など望むべくもない。その意味で、デカセギという目的に即していえば「正しくない」生活だったとはいえる。

長期的な計画の欠如、刹那的な生き方の実践という点で、ホセたちは『ハマータウンの野郎ども』に登場する青年達と相通ずるものがある。デカセギ労働とは、常に解雇や配置転換を伴うものであり、その意味で刹那的な生き方が1つの適応のあり方といえる。しかし、ホセの場合、それが労働市場への適応だったとはいえない。ホセは、同じ会社で16年間働き続けており、だからこそ余暇活動に力を入れる余裕があった⁸⁾。つまり、ホセは貯蓄可能な安定した生活を送っていたからこそ、浪費できたのである。だが、ホセのような浪費家は人間関係の構築にも積極的であり、断片化したデカセギ者を結びつけ共に会する機会を作り出してきた。つまり彼らは、結果的にコミュニティの紐帯強化という公共財を、自らの時間と金をかけて提供したことになる。これは、家族連れには時間的・金銭的に不可能なことであり、貯蓄を考えない「独身貴族」だからこそできることであった。家族形成は、第二世代の社会化というニーズを生み出すため、コミュニティ形成に対する需要を高めるといのが先行研究の見解となる。だが、湘南台の場合そうとはいえない側面が多分にあった。

前出の Mahler (1995) や Menjivar (2000) は、非正規滞在で仕事にもあぶれる生活困難が余裕のなさを生み出し、コミュニティの紐帯を奪っていくさまを描いた。安定した在留資格で、リーマン・ショックまでは失業率も低かった南米系コミュニティだが、2人の著作を想起させるかのように紐帯は断片化していた。家族連れの多くは、家族以外と交際する余裕がなく狭い社会関係で充足する傾向にあった。それを補っていたのが、ホセのような独身の若年層の余暇活動というわけだが、そうした構造を根底から掘り崩したのがリーマン・ショックであった。それがコミュニティにどのような影響を及ぼし、どのような生き残りの試みがなされたのか、次節でみていくこととする。

5. 野郎どもの宴の後で——ラテンパーの生き残りとタノモシ

2008年のリーマン・ショックは、湘南台のアルゼンチン系コミュニティにも大きな影響を及ぼした。2008年9月から翌年3月にかけて、推定で半数程度の南米系労働者が解雇されたとされているが(樋口 2010)、湘南台もその例外ではない。前出のプレス工場も、数百名いた南米系労働者の派遣を全員打ち切りにするなど、自動車・電機産業では解雇の嵐が吹き荒れた。それまで一箇所で働いていたホセは、失業こそしなかったものの2008年10月から仕事が減少し、工場に18人いた外国人のうち年内に8人が、09年1月に5人が解雇された。それ以外の2人も2月に帰国し、残る2人のペルー人とホセは休業補償をもらいつつ週3日だけ出勤する生活となって月収も18万円、手取り13万円まで減ったため、仕事をやめて帰国した。図2が示すように、湘南台のアルゼンチン系コミュニティも若年層を中心に縮小したのである。

そうした影響は、ラテンバーを営むディエゴに対して大きく及ぶこととなり、彼はリーマン・ショック以降多くの苦難を経験してきた。ホセが帰国するなど、バレラのアサードグループも活動どころではなくなり、機材を処分して借りていた倉庫との契約も解除した。「独身貴族」の余剰と浪費により成り立っていたコミュニティの基盤は、大量失業により崩壊し、求職をめぐるネットワークが活用されるだけの状況となった。ラテンバーもホセのような常連客を失ったため、まず日本人客の獲得をめざしてさまざまな試みがなされた。ランチタイムやコーヒータイムの新設による日本人高齢者リピーターの獲得、沖縄料理の提供、サルサ教室、ライブ会場の提供、アムウェイに入会して会員のたまり場とする——これらはすべて失敗し、パートナーも次から次へと喧嘩別れしてきた。

ディエゴは、アルゼンチンでは沖縄県人会で活発に活動し、知り合いも多かった。しかし、89年に来日してから20回以上の転職を繰り返し、住居も神奈川県が一番長いものの大阪に何年かいたりするなど生活基盤が安定していない。日本にいる親族とも疎遠であり、信頼できる親族や友人という社会関係資本を構築できなかった。パートナーとなるのも、警察に手配されていることが後からわかった日本人など、安定した生活基盤を持たない同類結合の論理が強く働いている。ラテンバーに定期的に来るのも、鬱病を患い生活保護を受ける昔からの友人、アルコール依存で生活保護を受けるペルー人など店の経営には貢献しない人が多い⁹⁾。

そんな彼が思いついたのはタノモシであり、2011年に1口2万円と1万円のタノモシを1つずつ設立した(筆者は両方参加している)。タノモシならば毎月人が定期的集まり、店の売りに貢献すると思ったことが第1の理由である。第2の理由は、店の経営がうまくいかず借金が100万円程度まで膨らんで、回転資金が必要だったこともある。このうち、資金の獲得という点でいえば、タノモシには一定の意味があった。南米系移民から彼は高利(月1割)で借金しており、年利5%程度のタノモシは利払いの負担を大きく軽減させたからである。

一方、店の売りに上げという点でいえば効果は限定的だった。当初の頃こそ10名のメンバーのうち8割程度は参加していたが、ジュース一杯で帰る人も数名いた。数回目からは、半分以上が金だけ届けて集まりには出ずに帰るようになってしまった。これは、メンバーの一部はディエゴに金を貸しており、返済を円滑にするためにタノモシに入っただけで親睦には関心がなかったことによる。また、親睦を期待したメンバーであっても、ペルー人とアルゼンチン人が入り混じる会では相互に話が合わず、足が遠のくようになってしまった。両者をうまくつなぐのがディエゴの役割となるのだが、自分の店を切り盛りしながらでは難しい。結局、毎回参加してビールをたくさん注文してくれるのは、近所で食料品店を営むペルー人とその交際相手だけとなってしまった。

だが、ディエゴは低利の金融としてのタノモシに利点を見出し、2012年からは1口5万円の新しいタノモシを立ち上げている。結局、親睦目的でのタノモシが成立しなかったの

は、ひとつにはディエゴの動機が「不純」だったことによるだろう。これはホセが純粹に余暇活動を楽しんでいたのと対照的である。しかし、ディエゴにとって不幸なのは、アルゼンチンにいた時からの古い友人が1人としてタノモシに入っていないことであり、その意味で不安定で脆弱な社会的基盤のうえにしかタノモシが成り立たないことにある。ディエゴの場合、転職回数は例外的に多いといえるが、アルゼンチンで培った紐帯が日本で維持されないのは他のデカセギ者についても該当する。その意味で、社会関係資本を築けないディエゴの苦難は、アルゼンチン系コミュニティ一般にとっても同様であり、ホセのような「独身貴族」がいなくなれば切れる程度の脆弱な紐帯しか築けなかった。

6. 高齢層の「安定した生活」とタノモシ

だが、前節でみたような「断片化した紐帯」(Menjivar 2000)は、コミュニティ全体に該当するわけではなく、年代による相違がある。それを表すのがリーマン・ショックの影響であり——少数サンプルの暫定的な分析でしかないという留保はつくが——表3から失職の程度の違いがみてとれる。一般に、日本では高齢層から先に解雇されるといわれるが、労働市場を細かくみれば一概にそうとはいえない。50歳以上のうち、輸出産業への派遣労働に従事する者は、かなりの数が解雇の憂き目にあったと考えられる。しかし50歳以上の者は、弁当工場以外の自動車・電機の大きな工場で働くことが経済危機以前から難しかったがゆえに、より賃金の低い仕事に従事する割合が高かった。具体的には、シャンプー工場、化粧品の箱詰め、清掃、クリーニング工場、ピザ宅配の自営、電気工事などが該当し、これらは輸出に影響されない点で自動車・電機とは異なる。つまり、労働集約的で賃金が低い、相対的に不利な仕事に従事していた者の方が、リーマン・ショックに伴う輸出不振のあおりを受けなかったという逆説的な結果がもたらされた。

表3 2008年時点での年齢と経済危機に伴う失職の有無

	なし		あり		合計	
	N	%	N	%	N	%
50歳未満	6	35.3	11	64.7	17	100.0
50歳以上	8	80.0	2	20.0	10	100.0
合計	14	51.9	13	48.1	27	100.0

カイ二乗検定 $p<.05$

だからといって、もともと高齢層はコミュニティを広く組織化するような役割を担っていたわけではなく、全体としての紐帯は断片化に拍車がかかったといえる。とはいえ、高齢層が独自に持っていた紐帯は、リーマン・ショックにあっても影響を受けなかった。その一例として、前節とは異なり親睦目的に特化した一世のタノモシを取り上げよう。このタノモシの原型は、1990年に日野自動車働く同僚が集まったところから始まっている。この時は富士急ハイランドにみんなで行き、それから各自が友人を連れてきて年1~2回ディズニーランドなど小旅行を楽しむグループとなった。ところが、転職や離日により同僚と

の付き合いは減少し、結果的にはアルゼンチンから付き合いがある者同士が集まる場となった。

楽しいことはもっと頻繁に行おうと、2002年から毎月集まるタノモシにして現在に至っている。約20名を目安に会を立ち上げ、1万円を持ち寄る他に2000円ずつを積み立てて旅行費用に当てている。このタノモシは、毎月湘南台駅近くのカラオケルームで行っているが、必ずしも全員が湘南台に住んでいるわけではない。会計や事務を司る責任者は八王子に住んでいるし、何かあると資源を負担してくれる派遣会社の経営者は平塚にいる。湘南台に住むメンバーが多いから湘南台を開催場所としているだけであり、メンバー編成も湘南台という日本での地縁を基盤としているわけではない。20名のメンバーのうちコアとなるのは4組の夫婦8名で、いずれもアルゼンチンにいた時からの知り合いである。

このタノモシがリーマン・ショックを経ても継続しているのは、メンバーのうち派遣労働者がおらず失業した者がいないという条件がまず存在する。2人は派遣会社の経営者であり、自動車・電機ではなく食品や軽工業に派遣しているがゆえに大きな影響を受けなかった。次に、純粋に親睦目的に特化し金額も無理なく払える範囲だったということもある。一世が中心のタノモシでも、鶴見の電設業者が集う1口20万円のビジネス目的のものは、リーマン・ショックの影響で一巡後継続しなかった。さらに、アルゼンチンから家族ぐるみの知り合い同士が核になるがゆえに、親睦目的のタノモシがそれ自体として継続できた。これは、見知らぬもの同士が多く親睦として成立しなかったディエゴのタノモシとは大きな相違である。

さらに、通常は「経営者」「親族」といった属性をもとにタノモシが組まれるが、ここでは経営者も労働者もアルゼンチンからの友人という資格で加入している。経営者は、行事の際に必要な資源を負担することでタノモシを支え、ホセのような役割を果たす。バレラのアサードグループは、リーマン・ショックによって組織を支えてきた者に余裕がなくなり崩壊したが、このタノモシはそうした影響もなかった。高齢者は、在日南米系社会では注目されてこなかったし、現実には不利な条件下で働いているが、そうであるがゆえに経済危機に際して「意外な安定性」を発揮したのである。

7. 結語に代えて

ここまで、2節で提示した問いに答えうる事例を引きながら、湘南台のアルゼンチン系コミュニティの動態を描き出してきた。2節で述べたように、これは典型的な南米系コミュニティの1つでもあるため、ある程度一般化した知見をこの事例から導き出すこともできるだろう。報告を終えるに際して、2節で提示した問いに答える形で知見をまとめていきたい。

第1に、就労を緩やかな説明変数としてコミュニティのモノグラフを描くという狙いは、外的れでなかったと筆者としては考える。コミュニティの形成、紐帯の形成、リーマン・ショック後の変化、年代ごとの相違といった側面は、就労状況の特質と不可分の関係にある

ことが本稿の記述からも伺えるからである。だが、職場を介した社会関係の形成については、十分扱うことができなかつた。既婚女性の場合、子どものために休日を取りやすい職場に集中し、そこで独自の紐帯が発達するような側面があり、それについては別の機会に考察したい。

第2に、湘南台にアルゼンチン系コミュニティが形成されたのは、AB兄弟が湘南台で働くうちに人材斡旋に乗り出すようになり、アルゼンチンから湘南台に至る経路が確立されたことによる。アルゼンチン日系人の7割は沖縄系であり、その多くがAB兄弟と提携した沖縄系の旅行社を使って渡日したことから、他の国籍ではありえない集住が生じている。当時、他にも5社程度の旅行社が日本での就労斡旋を行っていたが、聞き取りをまとめると7割程度が沖縄系旅行社→AB兄弟で就労という経路を用いていた。その意味で、湘南台への集中はよく言われる地縁・血縁ネットワークに依拠したものではなく、特定の斡旋経路の市場占有率が高かったことで生じたものである。

第3に、アルゼンチン系コミュニティにはまとめ役となるような「有名人」がいない。ブラジル系コミュニティであれば、エスニック・ビジネスの経営者や聖職者がコミュニティの顔となってきたが、アルゼンチン系にはそうした存在がいなかつた。アルゼンチン系ビジネスで零細自営業以上の規模になっているものは、人材派遣業以外存在しない。人材派遣業者は、コミュニティの代表として表に出るのを躊躇い嫌がるし、一般労働者との付き合いもあまりしない。労働者を商品とするビジネスが、コミュニティを代表する難しさがここにある。それに対して、コミュニティの紐帯形成に必要な資源を負担するのは「独身貴族」であるというのが、本稿で得られた知見であった。ここでいう独身貴族とは、派遣労働についているが相対的に安定した居住・就労状況にあり、貯蓄より現在の消費を楽しむ者を指す。そうした者が、周囲を巻き込んで余暇活動にいそしむことで、「断片化された紐帯」をつないでいく役割を果たす。家族連れはコミュニティの核になるように思われるが、実際には仕事と家庭生活で余裕がなく、エスニックな紐帯は独身時代より減少する（かといって子どもを介して日本社会との接点が生じるというわけでもない）。

第4に、リーマン・ショックは大量失業を生み出すという全体的な影響に加えて、「独身貴族」の生活基盤を破壊することにより、紐帯の断片化を進める結果をもたらした。紐帯を維持する資源を提供する余裕がなくなれば、集団内部で蓄積された社会関係資本も劣化していく。それゆえ、本来は高度な連帯がなければ成立しないはずのタノモシも、必要に迫られて初対面同士が顔を合わせるような不安定な状況が生じる。これは、社会関係資本の劣化→劣化した社会関係資本への依存→アクセス可能な資源の減少→状況の悪化という悪循環をたどることになるが、その帰結については現在調査中であり結論を留保しておく。

第5に、前段のような状況はコミュニティ全体に該当するわけではない。高齢層は、デカセギ労働市場のなかでは輸出産業ではない周辺部に組み込まれたため、リーマン・ショックの影響が小さかつた。それゆえ、若年層が帰国の途につくなかでも高齢層のほうが湘

南台に留まることとなり、社会的紐帯も維持されている。高齢層は所得が低いがゆえに、コミュニティ全体にまたがる紐帯を作るほどの資源を持たないが、高齢層同士の紐帯を維持する程度の余裕はあった。その結果、リーマン・ショック後のアルゼンチン系コミュニティは、独身貴族の帰国・消滅と若年層・家族持ちの紐帯の断片化、相対的に変化のない高齢層という形で変化したと思われる。

最後に、本誌の性格に即した政策的含意について、これまでの知見からまとめておきたい。聞き取りの中で、「日本人住民との接点」「日本の公的・準公的機関との接点」に言及した者はほとんどいなかった。1人が藤沢市の日本語教室と国際交流協会に参加していたが、それ以外の者は個人レベルでも「日本人社会との接点」をほとんど持っていない。これは、自治体が外国人住民と接点を持つようとする努力が実効性を持たないだけでなく、「移民」と「地元民」の間に社会関係が構築されていないことをも示す。これは、単に近隣関係だけでなく職場を介した社会関係も形成されないことを意味する。移民同士で社会関係が完結するような孤立したコミュニティが、同質的でありすぎるがゆえに変化に対して脆弱なことは、5節で見たとおりである。実際、工場での派遣労働という「デカセギの仕事」から脱出するには、日本人やハローワーク、日本語の求人広告といった「日本人社会との接点」が大きな意味を持っていた（稲葉・樋口 2013）。「弱い紐帯の強み」というネットワーク論の知見がそのまま該当するわけであり、この接点の構築が移民コミュニティの脆弱性の解消に結びつく。ただし、個々の移民が接点を作り出すような政策設計は、あまり現実的とはいえない。各節でみたような移民ネットワークを生かすような形で、移民コミュニティと日本人社会との接点を作り出すような工夫が必要になるだろう。

[注]

1) アルゼンチン系とは、「国籍に関係なくアルゼンチンに生活の基盤をおいていた人」の所産という意味を込めている。

2) 全員について、筆者2人と少数を丹野清人氏が面接して聞き取りした。基本的な調査項目は以下の通り。個人の属性、移住経歴（経緯、空間移動、職業）、日本での社会関係（ネットワーク、組織参加）、送金や帰国後の状況、世帯の基本状況（構成員、基本資産、生計手段）。個人の属性と移住経歴については、さしあたり稲葉・樋口（2010）で簡単な分析を行っている。

3) アルゼンチン日系人口のランダム・サンプリングを行うことは不可能だが、在亜沖縄県人連合会が作成した電話帳は、かなりの網羅性を持っており、それを通じたサンプリングという可能性はあった。しかし、アルゼンチン日系人の7割が沖縄系といわれているとはいえ、本土出身者が欠落したサンプリングは望ましくない。また、プロジェクトはデカセギ調査であってアルゼンチン日系社会調査ではないため、デカセギ経験者に絞って聞き取りする必要がある。そうしたことを勘案したうえで、電話帳を使うのは断念している。

4) 日本で知り合ったアルゼンチンの友人及び日本人の友人の数 ($p<.01$)、アルゼンチンからの友人及びデカセギに出た家族数 ($p<.05$)。

5) 登場する固有名詞はすべて仮名。

6) これは単に数時間で済むバーベキューではなく、専門業者から仕入れたレチョン（子豚の丸焼き）を夜中の2時から置き火で加熱するような本格的なものである。椅子やテーブルも共同購

入しており、その意味で組織立ったイベントと考えたほうが妥当だろう。

7) そのうち1名は、自分で自動車の改造を試みるうちに整備工場に通うようになり、土日はそこで働きつつオーナーが組織する日本人「走り屋」のグループにも入っている。もう1名は、夢だったというマツダのRX-7を購入し、工場を解雇されてから始めたエンパナダ製造の仕事で配達のために使っていた。2人とも、日本での社会関係は非常に豊かだったが、ホセと同様にほとんど貯蓄はできていない。もっとも、アルゼンチンで「走り屋」は富裕層だけがなれる贅沢であり、日本にいるうちにそうした経験をしておきたいという者はいた。これは自動車に限ったことではなく、海外旅行やDJで「皿回し」するといった例がある。

8) 注7で述べたエンパナダ製造の青年は、それまでの10年間で8つの仕事についている。だが、彼はずっと湘南台で両親と同居しており、その意味で人間関係を構築する余裕はあった。

9) ディエゴはそうした困難を抱える人に対しては親身に接しており、それもあって行き場のない人たちがディエゴの周囲に集まるといった要素はあるだろう。

[文献リスト]

Breton, R., 1991, *The Governance of Ethnic Communities: Political Structures and Processes in Canada*, New York: Greenwood Press.

藤原法子, 2008, 『トランスローカル・コミュニティ』ハーベスト社.

Gans, H. J., 1982, *The Urban Villagers: Group and Class in the Life of Italian-Americans*, updated and expanded edition, Free Press. (=2006, 松本康訳『都市の村人たち——イタリア系アメリカ人の階級文化と都市再開発』ハーベスト社.)

樋口直人, 2010, 「経済危機と在日日系南米人——何が大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622号.

———, 2011, 「経済危機後の在日南米人人口の推移——入管データの検討を通して」『徳島大学社会科学研究所』24号.

———, 2012, 「鶴見で起業する——京浜工業地帯の南米系電気工事業者たち」樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社.

広田康生, 2003, 『新版 エスニシティと都市』有信堂.

稲葉奈々子・樋口直人, 2010, 『日系人労働者は非正規就労からいかにして脱出できるのか——その条件と帰結に関する研究』全労済協会委託研究報告書.

———, 2013, 「失われた20年——在日南米人はなぜ急減したのか」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』14号.

Jones-Correa, M., 1998, *Between Two Nations: The Political Predicament of Latinos in New York City*, Ithaca: Cornell University Press.

梶田孝道・丹野清人・樋口直人, 2005, 『顔の见えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.

Light, I. and E. Bonacich, 1988, *Immigrant Entrepreneurs: Koreans in Los Angeles 1965-1982*, Berkeley: University of California Press.

Mahler, S. J., 1995, *American Dreaming: Immigrant Life on the Margins*, Princeton: Princeton University Press.

Margolis, M., 1994, *Little Brazil: An Ethnography of Brazilian Immigrants in New York City*, Princeton: Princeton University Press.

Menjívar, C., 2000, *Fragmented Ties: Salvadoran Immigrant Networks in America*, Berkeley:

University of California Press.

Min, P. G., 1996, *Caught in the Middle: Korean Communities in New York and Los Angeles*, Berkeley: University of California Press.

二階堂裕子, 2007, 『民族関係と地域福祉の都市社会学』世界思想社.

奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場』東京大学出版会.

大倉健宏, 2012, 『エッジワイズなコミュニティ——外国人住民による不動産取得をめぐるトランスナショナルコミュニティの存在形態』ハーベスト社.

小内透・酒井恵真編, 2001, 『日系ブラジル人の定住化と地域社会』御茶の水書房.

Portes, A. and A. Stepick, 1993, *City on the Edge: The Transformation of Miami*, Berkeley: University of California Press.

谷富夫, 1992, 「エスニック・コミュニティの生態研究」鈴木広編『現代都市を解説する』ミネルヴァ書房.

Waldinger, R., 1996, *Still the Promised City? African Americans and New Immigrants in Postindustrial New York*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

(付記) 本稿は科学研究費による研究成果である。